ないが生活そのものが念仏に帰すと考えていたのではあるまいか。

以上、諸師の理想的生活を考えてみたが、いずれの諸師も外見上念仏を多念相続する立場である。また阿弥陀仏の本願という他力を信じて念仏するという安心も基本的には変わりないということがわかった。またいずれの諸師の考え方も、救われるのは臨終に正念することであり、そこに至るまでの外見上の生活態度も大差はないと考えられる。以上のような考察に立って考えていくと最も異なるのは信の取り方であり、念仏行に帰すまでの道筋であることが明確となったのである。

おわりに

法然浄土教を志す者として最初にこのテーマを取り上げたのは、ひとえに『選擇集』撰述後の選擇をする必要があるからである。『選擇集』の前提は仏教を志す人が対象であった。したがって現代に生きるわれわれとしては当然、法然浄土教を信仰の対象とするためには、『選擇集』が前提としている思想世界に入り込むための選擇（『選擇集』以前の選擇）と『選擇集』以後に変化のあった仏教思想の選擇という二つの選擇を自らの心の中でしなくては、本当の

意味での深心の確立とはならないのである。『選擇集』以前の選擇とは、なぜ宗教が必要かなぜ仏教でなければならないのかということである。この問題については別に整理したいと考えるが、今は法然門下が分流していった過程とその思想を知ることで、本当に現代に合った法然以後の信の確立について、諸師の安心論を通して見ていきたいと考えたのである。

人間は本来懈怠多き者であり、宗教の必要性すら感じないのが現代の生活とも言える。このような中、心の持ち方いかんによっては行の多様性を認める方向が、現代には必要なのではなかろうかというのが、私の一つの見解である。例えば隆寛の言うように阿弥陀仏の絶対性をまず認め、念仏の行を主軸としながらも阿弥陀仏のためと思って生活するということが一つのヒントとなろう。

現代生活は生産的生活である。そして、経済的に非常に安定した時代である。しかし、その中にあってなお仕事の目的を見失っている人が多いことも事実である。現代ではこれらの人に出家を強要することは不可能であり、出家をして得られる利益が往生ということでは、現世で遊んだほうが楽しいかもしれない。

これらの人に宗教の意義を知らしめるためには、生産的心と宗教心の両立を説かなければならないと考えるのである。浄土教の本来の姿も現代人に一つの生き方を提示するものであって、往生を勧めるものであってはならないのではなかろうか。

今回諸師の安心論をまとめて、諸師がそれぞれに心というものを重視し、心の伴わない行

は全く無意味であるという共通の認識に基づいて論が展開されていることが良く理解できた。現代人の行に心を入れるものが宗教であれば、宗教の役割は非常に大きいと言わねばならない。また今回取り上げた諸師はいずれも一念義批判の立場であり、その生き方の提示には共通したものがある。したがって、その心の内を聞かない限り外見上の生活はいずれも区別がつかないものであったと思われる。しかも法然が浄土教を一般大衆のものとした「三心が自然に具する」という立場も共通しており、これら三人の諸師は繰り返しになるが、自らの信を確立する過程が異なっているのであって、そこからの解釈の仕方が異なっていたのである。これから信を取ろうと考えている人の選擇の材料として、これら諸師の考え方は重要な意味を持つことは明らかである。

また、法然の選擇思想をそのまま受け継いだのは聖光と考えることができた。隆寛および証空は、すでに仏門にいて相当の修行をしてきた人を対象とした理論展開をしていることが、信の取り方を変形させているのであろう。これを本論の結論としたい。浄土宗はその後、良忠に受け継がれ、また分流を起こす。したがって『選擇集』以後の選擇はもっとこれから深く進むであろう。とりあえず、本論を『選擇集』以後の選擇の第一歩としたい。

最後になりましたが、本論を書くにあたりまして、主任教授であります阿川文正先生をはじめ、個別に一年間ご指導いただきました柴田哲彦先生、文献等のご紹介から適切なご助言をいただきました廣川堯敏先生に心から厚くお礼申し上げます。また私に改めて浄土教を学

ぶ機会を与えてくださった祐天寺住職をはじめ役員、檀信徒総代および関係者の皆さまに深く謝意を表するものであります。